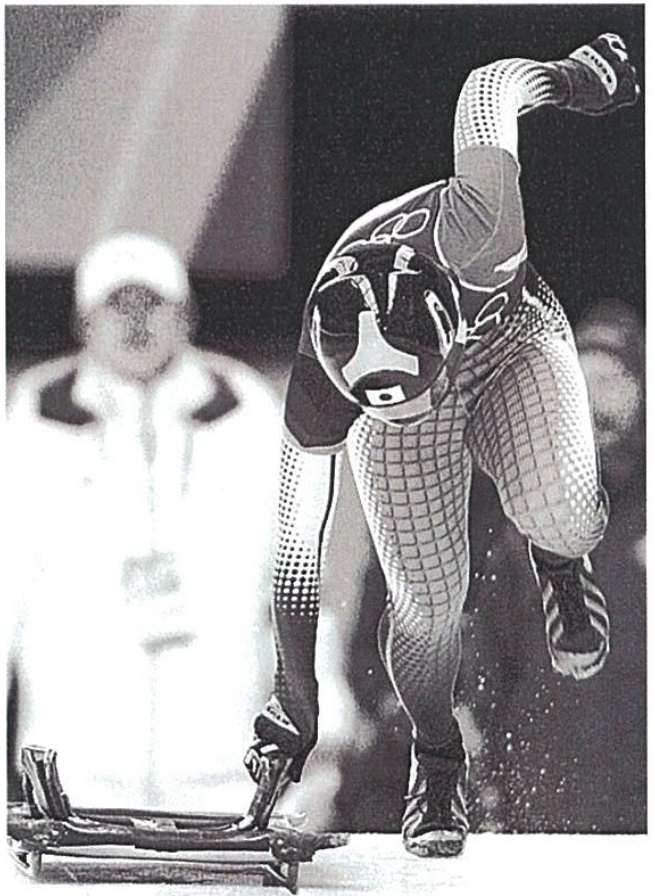


へ先の練習試

トリーノ五輪終えて

2月26日、トリノ五輪が幕を閉じた。「上位を狙える選手になってトリノの舞台に立つ」スケルトン女子代表として初出場した2002年ソルトレークシティー五輪を終えた後、心に強く決めていた。この4年間、毎年、約半分は欧米諸国を転戦し、世界の選手と戦う中で、たくさんの喜びもあった。一方で、日本のスポーツが置かれている現状も見せつけられた。次の五輪に向け、組織的な強化の必要性など課題を痛感させられた五輪でもあった。(中山英子)

スケルトン女子 14位となった中山英子の2回目のスタート＝2月16日、チェザーナ・パリオル(共同)



が始まった。会場はトリノ市内からバスで1時間半ほど離れたチェザーナ・パリオルのコースだ。コース脇が人で埋め尽

無念と達成感と

「積み上げ大切」痛感

くされていたソルトレークシティー五輪ほど観客は多くなかった。ふだんのワールドカップ(W杯)とさほど雰囲気も変わらない。少し寂しい気もしたが、妙な緊張感もなく淡々としていた。

「このままの道のりを思い出して、ゆっくり休みなさい」とアドバイスをしてくれた。おかげで、14位。ソルトレークシテ

「お世話になったのか」「顔見せできない成績だったらどうしよう」。前日の夜、吐き気がするほど思い詰めていた私に、選手村に常駐していた日本オリンピック委員会の大西洋平医師が「これまでの道のりを思い出して、ゆっくり休みなさい」とアドバイスをしてくれた。おかげで、14位。ソルトレークシテ

「自分の持ち味のスプリントをしっかりと走って、思い切ったレースをしよう」。驚くほど晴れることはすべてやって戦

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

朝、吹雪いていた雪が昼にやみ、青空に変わっていた。公式練習での状態は必ずしも良くなかった。「一体、いろんな思いでやってきた4年の月日は何だ

1回の滑り終えて、合計タイムで出場15人中的きた片手スタートでダッシュするスプリントタイ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

「自分の思い、やりたいことをそりに押しつけて減速してしまう」。無意識にその上で動いてしまっていた。タイムロスにつながる滑走中の操作を最小限にするには、フォームの安定が大切だが、それができていない上に不要な動きが多かったことが減速の原因だった。競技を始めたころ、基本をしっかりと身に付けられなかったことに加えタイムが落ちるのを恐れ、フォーム修正に徹し切れなかった。今大会のレース後、リ

試練の先へ

トリノ五輪終えて

中

4年間、競技を続けてくる中で、一番悩みだったのは技術指導者、トータルで競技について相談

コーチに聞いたりしながら乗り切っていた。しかし、五輪も近づいてくるし、五輪も近づいてくる、それもしづらい。手探りでやらざるを得ないことが多かった。最新の情報を持つコーチが欲しい。若い選手のためにも絶対に必要だ」

* *

今のところ、スケルトンは国別のチーム単位で動くのが主流だ。大半の国には専門コーチがいる。ソルトレークシティー五輪以降、海外チームが強化に力を入れるのを

ボブスレーも、スケルトンも、ワールドカップ（W杯）転戦に伴う選手個人の負担は年間100万円に上る。道具も自分

専門コーチ不在 長期的な強化道筋を

目の当たりにし、自分の課題が分かっていただけに焦りもあった。今季は思い切って、海外の専門コーチを自費で雇った。

コースを持たない英国で女子の若手シェリー・リアも、W杯参戦初シーズンは今季、入賞できる選手をつくり上げてきた。ドイツは2選手に1人くらいの割合で担当コーチがいる。各国の強化には既に始まっている。

選手村で同室だったボブスレーの桧野真奈選手となる、一選手の力だけではどうすることもできないのが実情だ。スケルトンで男女合わせて三つのメダルを獲得したカナダチームは、その本場ドイツの元選手強化のためものだ。

また、1000人単位の公募者から新人発掘を1人が担当している。各国の強化には既に始まっている。

できるコーチがチームになかったことだ。滑りについて悩んだ時は、チームメイトに相談したり、海外チームの選手や

手も同様の悩みを抱えて

信頼関係を築いてチームをつくり上げた。自国に行って3年がかりで強化システムは目を見張るも

（中山英子）



女子スケルトンのフラワーセレモニーで喜ぶ(左から)2位のラッドマン(英国)、優勝のペデルセン(スイス)、3位のホリングスワース(カナダ)＝2月16日、チェザーナ・パリオル(共同)

がある。ビジョンを持って長期スパンで選手強化をしている国は必ず結果を残している。

* *

日本のスケルトン陣は五輪シーズンに夏の合宿が3回。冬場にW杯派遣選手選考会を兼ねた合宿を2カ所で行ったが、滑走について十分な指導を受ける機会はなかった。

「強化の道筋が見えないのは選手にとって大きな不安。各国と戦う前に差がついてしまつ」。こんな会話を桧野選手と何度繰り返しただろう。しっかりした青写真のない組織の中では、選手が勝つ力を蓄えるのは、かなり難しい。4年後のバンクーバー大会に向けた戦いは既に始まっている。

試練の先へ

トリノ五輪終えて

下

高松一彦コーチがいる。「1回きちんと指導を受けてみたい。それから先を考えよう」。そんな気持ちから同行を申し出た。

日本リージュは今大会、2人乗りで林部吾郎・戸城正貴組が12位、女子1人乗りの原田窓香は13位。同種目で入賞した札幌大会を除けば、それぞれ過去最高タイ、過去最高成績を残した。長野五輪をきっかけに集まった長野市内の少年団出身の選手が成長、高松コーチを中心に3年でチームを立て直した。

レースを終えて2日後の2月18日から、日本リージュチームの滑走トレーニングに同行し、オーストリア・イグルスに向かった。2回の五輪に出場するという貴重な体験はできたが、滑りの完成には程遠いと感じていた。リージュチームには、カルガリー、アムには、カルガリー、アルペールビル、リレハンの1968年、日本に初めてリージュを教えた

思い起こす原点

練習初日には「そのの原点に戻ろう」と、イグルス近くのアップサムという村に行き、2ヶ余りの山道を木ぞりを持って上り、選手はそり遊びに歓声を上げた。札幌五輪前の1968年、日本に初めてリージュを教えた

高松一彦コーチがいる。「1回きちんと指導を受けてみたい。それから先を考えよう」。そんな気持ちから同行を申し出た。

そり遊びの前にカールさんから説明を受ける日本リージュチームの選手たち。2月19日、アップサム(オーストリア)



スポーツ文化育てて

「など冬季競技が生活に密着し、地域の応援も熱い小さな村で、トリノ五輪では二つのメダルを獲得したと、盛り上がりつつ冷めていくのを見ていることをカールさんは自慢げに話してくれた。「歴史的、文化的背景も知らない」と、本当の意味でスポーツの楽しさは伝えられない」と高松コーチは、選手をここに連れてきた理由を話す。「競技だけしか知らないと、楽しさをいつの間にか忘れてしまつ。こういう文化の延長線上に、自分たちがいるということを選択しない。」

「競技が楽しかったこと、また、五輪後の長野の街と競技への熱が少しずつ冷めていくのを見て、「スポーツの文化度を上げることに貢献したい」という気持ちが強かったことも大きな理由の一つだった。

勝つことばかりにとらわれて、もがいた4年間だったが、ようやく、振り出しに戻ったように思った。競技そのものを選ばない。また、目の前にある競技施設存続や活用も真剣に考えていかななくてはならない。」

慣が残されている。休日トルさん(78)も訪れ、日だつたこの日、親子連れも何組か見かけた。頂上には小さな小屋があり、村の老人たちが飲み物を出した。「カフェ」のような場所があり、会話を楽しんでいた。

この辺りには、林道を使ったそりコースが数多くあり、現在でも生活の中でそり遊びを楽しむ

「思い出だけではない」

強化とは時間のかかるもの、文化は育てていくものだということとをあらためて感じた。一つのメダルに終わった日本の冬季競技の現状を変えていく手掛かりがここに残されている。そんな気がした。

（中山 英子）